

青年期女子における性アイデンティティの変容過程

立教大学 神田久男

A study on the developmental process of sexual identity in adolescence (female)

Hisao Kanda (Rikkyo University)

This study was designed to explore the developmental aspects of sexual identity in female adolescents. Using the General Health Questionnaire, 45 subjects of high mental-health tendency (High-group) and 45 subjects of low mental-health tendency (Low-group) were selected from 171 female university students. Two self images-present self image and ideal self image were measured by Masculinity (father, man)-Femininity (mother, woman) Scale. The main results were as follows: Between the groups, there was a significant difference in the scores of masculinity, but no difference in femininity scores. Namely, it seemed that the High-group had acquired more masculinity than the Low-group. Then, the process of counseling with a female student who suffered from an eating disorder was discussed including the following two points: the developmental process of sexual identity and therapeutic approaches for female adolescent cases.

Key words: sexual identity, masculinity, femininity, adolescence.

問 題

青年が男性性・女性性をどのようにとり入れ、いかに身につけていくかは、青年期のアイデンティティ形成にとって重要な課題である。対人恐怖や退却神経症 (withdrawal neurosis)、それに摂食異常 (eating disorder) などの症例に象徴されるように、最近の青年期の臨床事例のなかには主に仲間集団との関係から自他を比較し、自己の身体をも含めて“男性 (女性) らしくない”ことにこだわり、男性性・女性性の問題として訴えてくる例は少なくない。しかもそれは、アイデンティティ拡散状態に陥り、自己の存在証明を模索し苦悩したすえの訴えというよりは、他者との比較や身体症状、スタイルといった表層的・外面的なことへのこだわりから生じているニュアンスが強く、それだけセラピーに対する期待は性急で、短期間で納得できる改善が得られなければすぐに中断になってしまう可能性をはらんでいる。それではそうした青年は、パーソナリティのいかなる特性を

男性的・女性的ととらえ、どれほど身につけていると認識しているのかという、青年の性アイデンティティの様相を理解するとともにその変容の過程を把握することは、彼らへの効果的な治療的アプローチを検討していく上でぜひとも必要な課題となる。

山口 (1995) は男性性・女性性の2側面に関する一連の研究のなかで、従来の性度テストのように男性性・女性性が単一の次元の両極に位置するのととらえるのではなく、男性性・女性性を2つの独立した次元として測定するテストを開発している。そしてさらに男性性・女性性のそれぞれを、女性 (男性) に対する男性性 (女性性) と、子どもに対する父親 (母親) としての男性性 (女性性) という2つの側面に分け、中学生・高校生・大学生を対象にこの4つの側面をどのように望むようになるか、その発達的变化を検討している。こうした観点から青年期の性アイデンティティをとらえようとする試みは、臨床的に青年の成長過程を理解しようとするとき、とても有効なアプローチ

となる。その理由は、まず、男性性と女性性が共にそれほど身につけていない青年もいれば、両方の特性を適度に合わせ持つ青年もいるわけで、そうした程度の差の把握が可能になるからである。そして、父親的(母親的)な特性と青年期に特有の男性的(女性的)な特性とでは、そのそれぞれをどの程度とり入れているかによって発達の意味はかなり異なるのであり、この点についても容易に測定することができる。

そこで本研究の調査では、広義の男性性(masculinity)から父親としての男性性(父親性)と青年期男子としての男性性(男性性)の2つの側面を、また広義の女性性(femininity)からは母親としての女性性(母親性)と青年期女子としての女性性(女性性)の2側面をとりあげ、これらを測定する質問紙を新たに作成し、青年期の性アイデンティティの様相を把握する目的で実施した。すなわちここでは、生物学的に男性的・女性的と規定されているものではなく、個々人の内に概念化されたイメージとしての男性性・女性性をとらえることを意図している。ついで、この調査の結果に基づき、青年期に典型的な臨床例をとり上げ、その面接過程を考察することにより、性アイデンティティの具体的な変容の過程をとらえるとともに、青年期の臨床事例に対する効果的な治療的アプローチについても検討する。

なお、調査は青年期の男女を対象に実施している。そして、性アイデンティティの発達については男子と女子の場合で多くの共通点を含みながらも、やはり両者はそれぞれが固有の側面をもって成長していくのであり、分析は別個になされることになる。ただし本論文では、紙数の制約上、女子青年の結果についてのみ分析の対象とし、男子青年については別の機会に検討する。

質問紙調査による検討

方法

性アイデンティティの諸側面を測定する質問紙予備調査として、性アイデンティティに関する既成の質問紙(伊藤, 1978; Bem, 1974; Heil-

brun, 1976; 山口, 1995)などを参考に、広義の男性性・女性性を記述していると考えられる性格特性について、意味が重複しているものなどを除き180項目を選択した。これを大学生1~4年306名(男147名, 女159名)に提示し、以下の5つのカテゴリーに分けるように教示した。①一般に、父親あるいは父性の特性やイメージを示していると思われるもの(父親性)、②一般に、母親あるいは母性の特性やイメージを示していると思われるもの(母親性)、③一般に、20歳前後の男性の特性やイメージを示していると思われるもの(男性性)、④一般に、20歳前後の女性の特性やイメージを示していると思われるもの(女性性)、⑤上記4カテゴリーのいずれにもあてはまらないもの。この結果から、①~④の各カテゴリーごとに選択率の高い項目から12項目ずつ、合計48項目を選び、これを本調査の性度テストとした。48項目の選択率の範囲は58.2%~96.1%, 平均74.8%である(表1)。

本調査では、48項目について、同一被験者につき3種類の教示にしたがって3回の評定を求めた。(A)「つぎにあげる項目は、人の性格特性や行動の特徴を表すものです。これを読んで『現在の自分』に最も当てはまるところに○印をつけてください」。(B)「今度は、あなたが『将来、こうありたいと思う人』を思い浮かべてください。それがイメージできたら以下の項目について最も当てはまるところに○印をつけてください」。(C)「つぎの項目は誰でもが多少は身につけている性格特性や行動の特徴です。そこでそれぞれの項目について、相対的に比較して、つぎの4つのカテゴリーの内、どれに最もふさわしい特性や特徴だと思いますか。当てはまる記号を記入してください」。ここでいう4つのカテゴリーとは、予備調査の①~④に対応する。

精神的健康度

Goldbergの作成したGHQ (General Health

表1. 性度テストの項目

Masculinity		Femininity	
父親性	男性性	母親性	女性性
一貫性をもつ	独立心をもつ	包容力のある	おしゃれな
指導力のある	独創的な	良心的な	感覚的な
厳格な	行動力のある	思いやりのある	好き嫌いがはっきりした
状況を把握する	意欲的な	人を育てる	感傷的な
広い視野をもつ	競争心のある	かいがいい	清潔な
人に信頼される	夢が大きい	あたたかい	感受性豊かな
威厳のある	集中力のある	自己犠牲的な	感情的な
責任感のある	機敏な	世話好きな	しなやかな
頼もしい	熱中する	愛情豊かな	細やかな
冷静な	闘争的な	やさしい	愛想のよい
経済力のある	議論好きな	献身的な	人とうちとける
余裕のある	野心をもつ	いつくしみ深い	色気のある

Questionnaire; 一般精神健康質問紙) の日本版 GHQ 60 (中川・大坊, 1985) の評定。基本的には、健康な精神的機能が維持されている状態から問題のある状態 (神経症) へという一次元の軸が想定されており、個人がその軸のどこに位置しているかを判定することに主眼が置かれている (神田, 1998)。すなわち、性格特性そのものの把握を意図して作成されているわけではないので、性格異常や精神病理などの診断は対象外となる。また、質問項目には要素スケールとして身体的症状因子、不安・不眠因子、社会的活動障害因子、それにうつ傾向因子が含まれているので、日常の生活態度に加え軽度の身体症状や無気力、軽うつ気分など現代青年に特徴的な様態が比較的反映されやすいと考える。60 項目を 4 件法で評定。

調査対象者と実施手続き

私立大学生女子 1～3 年 171 名を対象に 1997 年 1 月に実施。調査は授業中に集団で実施し、所要時間は約 25 分。

結果と考察

GHQ の得点分布 (平均 = 17.4, SD = 10.61) に基づき、精神的健康度の高い方から順に 45 名 (高群, 10 点以下), 低い方から 45 名 (低群, 26 点以上) を抽出し、性度テストの結果について両群間

で検討する。

なお、性度テストの 4 つの下位尺度の α 係数は、父親性尺度; $\alpha = .74$, 母親性尺度; $\alpha = .82$, 男性性尺度; $\alpha = .76$, 女性性尺度; $\alpha = .72$ であったので、各尺度を構成する 12 項目の合計点を各尺度の得点として分析することとした。

① 各項目に対する認知的側面の比較

性度テストの 48 項目について、両群の選択率を集計したところ、各カテゴリーで上位 12 項目はすべて同じ項目であり、これは予備調査の結果とも一致している。さらに各項目ごとに χ^2 検定を行なったが、いずれの項目からも有意差は認められなかった。したがって、それぞれの項目がいかなる性のカテゴリーに属するととらえているか、その認知内容については、予想に反して両群間で明確な違いはないことになる。

② 現在の自己イメージ

高群では、各尺度の平均得点からすると男性性 > 女性性 > 母親性 > 父親性の順になっていて、男性性と女性性はほぼ同じ程度に身につけていることになる (図 1)。両尺度間の相関 (ピアソンの相関係数) は $\gamma = .619$ ($P < .01$) と中度の正の相関があり、これは女性性と他の尺度との相関と比べて最も高い。低群ではこの順位が、女性性 > 母親性 > 男性性 > 父親性となり、男性性と母親性は

入れ替わっている。しかも女性性と母親性の尺度間の相関 ($\gamma = .655$ $P < .01$) は、女性性尺度と他の尺度との相関よりはるかに高い。また、父親性尺度と男性性尺度の得点は48点より下まわり、広義の男性性は自分が身につけている性格特性や行動傾向としては総じて“当てはまらない”範疇に評定していることがわかる(各尺度の得点範囲は12~84点で、48点以上は“当てはまる”を、48点以下は“当てはまらない”を意味する)。

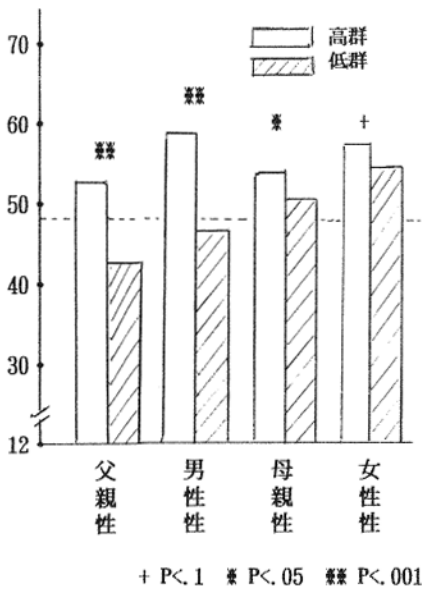


図1. 現在の自己イメージ

つぎに、両群の4尺度の得点を比較してみると、女性性尺度ではそれほどの差はみられず、両群でかなり近い程度に女性性は身につけていると認知していることになる。これに対し、父親性尺度と男性性尺度については両群の差異は顕著である。すなわち高群では、低群と比べると母親性はもとより、男性性・父親性も積極的にとり入れ身につけているととらえていることがわかる。この傾向は、男性性の高さは適応の高さやパーソナリティの成熟度と関連しているというO'Heron & Orlofsky(1990)や神田(1992)の報告ともほぼ一致している。たとえば、適応的な女子青年は、社会生活全般や対人関係においても自分なりの考えや興

味、関心をもって物事に意欲的に取り組み、独創性や行動力を発揮する傾向にあることは容易に想像できるわけで、ここでも男性性尺度にそれが反映されていると考えることもできる。これに対し低群では、すでに述べたように男性性・父親性尺度は共に高群と比べかなり低く、しかも平均得点が48点を下まわっている。つまり男性性にせよ父親性にせよ、基本的にはそれらが自分には“あてはまらない”、すなわち“あまり身につけてはいない”と認識している傾向にあるわけで、臨床的にこれは単に両群間の平均得点の差ということ以上に意味するところは重く、慎重な検討を要する。

③ 自らに望む特性

将来、どのような特性をどれほどとり入れたいと望むかについては、高群・低群それぞれが4尺度共ほぼまとまって高い得点を示していて、現実の自己イメージとの間にはすべての尺度で0.1%水準の有意差がみられた。高群では父親性>男性性>母親性>女性性の順であり、低群は父親性>母親性>女性性>男性性の順で、共に父親性尺度の得点が最も高い(図2)。さらに両群間で比較してみると、女性性尺度では有意差は認められず、これから身につけたいと望む水準について両群で差はなかった。一方、父親性、母親性、男性性では高群の方がより多く望んでいることになるが、なかでも男性性についてその程度の差は明らかである。これは、これまで積極的に人や社会とかかわり相対的により適応的な生活を維持してきた高群にとって、これからさらに独立心や行動力を持ち、ときには人と議論したり競争心をもって物事に取り組みたい、熱中できるようになりたいと願うこと、つまり、さらに男性性を身につけたいと望むことはそれほど無理なことではないし、むしろ成長の過程としては自然な流れである。ところが、身体的不調や自信のなさ、不全感などを感じている低群にとって、こうした男性性を身につけていくことの大切さを思い、それを望んでも、これが現実の生活でそれほど容易に実現されだろうかという懸念や戸惑いを抱いていたとしても不思議ではない。これに対し、父親性や母親性の項

目は、男性性の特性よりもより精神的要素を含んだ項目であり、自己期待として望んだ水準に評定することにそれほどの躊躇は起こらなかったと考えられるが、この調査の結果だけでは、この点はまだ推測の域にとどまる。

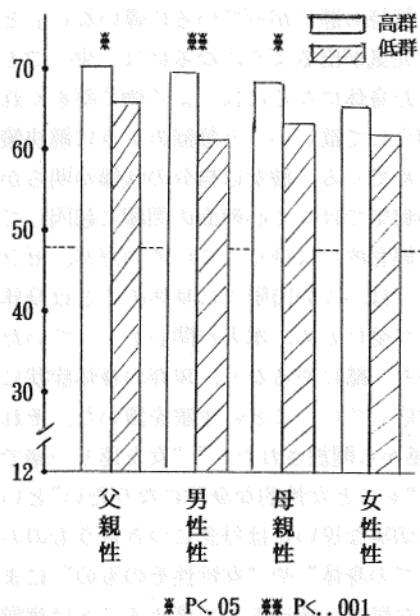


図 2. 自らに望む特性

現在、自分が身につけていると認識している女性性、それに、これからもそれをとり入れ自己に根づかせたいと望む女性性の程度はほぼ同じであるにもかかわらず、高群と低群とでは、父親性、母親性、それに男性性で顕著に異なった様相が示された。すなわち高群では、低群と比較して、父親性、母親性、男性性、とりわけ父親性と男性性という青年期女子にとって異性に属するものと認知されている特性において身につけている程度は高く、しかもこのパターンは概ねこれからとり入れたいと望む特性にも当てはまる。それゆえ、この結果を低群からとらえるならば、これから精神的健康を回復させ成長していくためには、父親性や男性性をいかに身につけていくかということが一つの重要な課題として示唆されることはいうまでもない。しかし、臨床的にこれは何を意味する

のであろうか。当然のことながらそれは、父親的ないし男性的特性を単純に一つひとつ積み上げていくことではない。これまで“あまり身についてはいない”ととらえていた異性に属する特性を、“少しは自分の身につけている”と実感できるようになるまでにはかなり複雑な過程が想定されるわけで、この過程を可能な限り解明していくことで、青年期においてこなしていくべき課題の具体的な方向性の一つを示すことができると考える。心理臨床の経験からすれば、青年期女子の事例でまさにアイデンティティ確立を目指して行われる面接は数多いし、ここでいう父親性と母親性の特性を合わせて「社会的に望ましい成熟した大人の性格特性」というカテゴリーでくくってしまうと、概念的にそれはアイデンティティ確立とかなりの部分で重なってしまう。しかしこれでは青年期女子（あるいは男子）に特有な性アイデンティティにかかわる発達過程を詳細にとらえることはむずかしい。調査であえて父親性・男性性・母親性・女性性という側面から青年期の性アイデンティティの様相を検討してきたのは、そこからさらにその変容の過程を解明するためであって、つぎに青年期女子の臨床事例をとりあげその面接過程をこうした側面から吟味し検討することにする。

臨床例による検討

ここでとりあげる青年期女子の事例は、この研究のために面接したものではない。昨今では青年期女子に少なくない摂食異常を主訴に来所され、性度テストとGHQの資料が得られた事例であり、本人の承諾が得られたのでここで検討する。本来、セラピー過程ではさまざまな要因が複雑に絡みあって展開されるのであって、事例検討とはそれらをすべて視野に置きながら考察されるべきものであるが、ここでは面接内容のかなりの部分は割愛し、あえて青年期女子の性アイデンティティ変容過程に焦点を絞って検討する。なお、本人のプライバシー保護のため、セラピー過程の本筋には支障のない範囲で、一部内容を変えてある。

事例概要

21歳の女性(大学3年)。家族は両親と4歳年上の姉の4人住い、「徹底した拒食と過食」を数ヶ月周期で繰り返している。高校1年の頃よりその傾向はあったが、最近は拒食が中心で、かと思うと突然むさぼるように食べては嘔吐する日が何日か続く。「食べられないというより、飲み込めないといった感じ」だと言う。体重は41kg前後で2年くらい月経はない。これは拒食のせいだと自分に言い聞かせても、過食のときはつじつまが合わなくなって極度の不安に襲われる。最も辛いのは、大学で女友達と一緒にいるとき、「いつも自分だけ浮き上がっているようで」「皆から取り残されてしまいそうで」怖くなって焦り、ただただ周囲に合わせてしがみつき、結局は疲れ果てて帰宅する毎日、不安全感だけが残る。朝、起きると身体中の関節が痛み、だるくて何もする気が起きない。突然、自分の部屋が汚れていると感じ、夢中になって徹夜で拭き掃除をしても、何もきれいになったとは思えない。深夜に「得体の知れない何か」がスーッと部屋に侵入してきて身体を切り刻まれたり強姦されそうで電灯は消せない。苛立ちと不安から衝動的な手首自傷行為を何度か繰り返す。以前に自分から精神科を受診したことはあるが、一度投薬を受けただけで、それ以降は通っていない。

初回面接時のGHQ得点は31点、これが終結時には19点になっている。

面接経過

面接は、基本的には週1回1時間。面接期間は2年2ヶ月。「 」内はクライアントの発言を示す。

面接経過は、身体症状・身体像にこだわる第I期、内的な自己イメージと徹底して向き合う第II期、社会生活に触れる第III期、自己イメージの再吟味の第IV期に分けて記述する。

① 身体症状・身体像へのこだわり(～5ヶ月)

表情をほとんど変えず、低い声で身体のだるさ、痛み、食事が思うようにとれないことを淡々と話す。対処法だけを聞きに来たといった雰囲気、

こちらからの質問にも無表情に具体的な事実のみを傍観的に答えるばかりで、自己の感情の認知とその言語化がきわめてむずかしく、対人関係を発展させる能力に乏しいアレキシサイミア(alexithymia)の傾向さえ認められた。「皆(女友達)と一緒にでないのは嫌だ」「人は異常に痩せてる私の身体を、気持ち悪るがっているに違いない」と繰り返し、「元気になるようになるには」「少しでもふっくらした身体になるには」「よく効く薬をくれる医者を紹介して欲しい」と毎回のように解決策ばかりを求めてくる。彼女は自分の状態が明らかに身体面の病気ではなく心理面の問題に起因していることは観念的には分かっているのだが、セラピストとしては、この段階では身体の問題は身体の問題として受けとめ、本人が関心をもっていた自律訓練法と一緒にやるなど、現存の身体症状に現実的に対応していくことに主眼を置いた。それゆえ、“疲労感から開放されたい”“女友達と一緒にありたい”“もっと女性的な身体になりたい”といった本人の切実な思いには丹念につき合うものの、“女性としての身体”や“女性性そのもの”にまつわる複雑な感情に焦点を当て深めることは意識的にしていない。

身体症状の顕著な改善や特効薬となる効果的な対処法が得られず、セラピストや自分自身に対する苛立ち・失望から、どこか気のない応答や予約時間の遅刻、連絡なしのキャンセルといった面接への抵抗が断続的につづき、一時は面接の中断も危惧された。やがて「(面接を)焦ってもしょうがない」というあきらめにも似た余裕がもてるようになって、「徹底した拒食」とは言ったが、最近では量はまだ極端に少ないものの日に二回は食卓に向かっていること、また、今でも「心身共に自分をギリギリ追いつめることでしか、自分を感じられない。その感覚は辛い、でも嫌いじゃない」と、日常生活での実感を少しでも表現できるようになるまでにはかなりの時間を要した。

② 自己イメージとの向かい合い(6ヶ月～1年5ヶ月)

女子のグループに受け入れられたいという強い

思いとは裏腹に、嫌われる不安から壁をつくって打ち解けられず、本心をおぼつたことがない。周囲の気持ちを気づかい、沈黙を恐れ、相手をほめてばかりで、本音とはズレてしまう。そうした言動から自分は判断され、その他者からの評価にまた縛られるという悪循環が生じている。そうしたとき、「男の子っぽい感覚で、男の子っぽく振る舞う」のが、関係をかろうじてつなぎ止めておく安全な術だという。

夢や家で描いた描画を自発的に数多く持参するようになったのはこの時期からであり、面接でもそれらを素材にドリーム・ワークやイメージ面接を適宜導入している。初期の夢では、“優しそうな女性が赤ん坊を抱いている。一転空が曇ってその子に雷が落ち、皮膚がケロイド状に焼けている…(場面は変わって)…この面接室に入ると先生(セラピスト)の前にグロテスクな顔をした人が座っていた。「アッ、私だ」と思った」といった深く傷ついた彼女の自己イメージは誰でもが気づく外見上の容姿に置き換えられている。描画では、ペニスをお身につけた素っ裸の若い女性が右手に剣を握り、眼光鋭く正面をにらんでいたりと、男女さまざまな表情をした仮面を前に、ミイラのようにやせ細った人間が「今日はどのお面をつけようか」と考えているなど、怒りを胸に秘めた両性具有の人間や統一性を欠くパーソナリティなどが一連のテーマとなって繰り返し描かれている。そこから思い出されるのは、幼い頃の「私は養女でお姉ちゃんは実の子、だからお姉ちゃんに両親をあげる」という固い決意であったり、「母が私とお風呂に入らなかったのは、私の身体が汚れているから。父はよく入れてくれた。でも、いつも私の裸をいやらしい目で見ていた」といった、家族にあって両親の子どもとしての、ひいては女の子としての存在基盤の危うさへと連想は広がっていく。この面接過程で、「ずっと心の奥底に押し込み凝固させていたものに少しずつ素手で触れるようになった」とはいえ、ときに心は根底から激しく揺さぶられ、統制しがたい感情に圧倒されそうになったことは否めない。心の深層に触れ実感することは大切で

あるが、その体験の仕方として、激しい感情に圧倒されたり、それを拒否・否定したりするのではなく、自らの体験そのものをじっくり味わい、事実としてとり入れていくことの方が重要であり、そのために、そうした体験や世界をことばや描画によって二人の間に外在化させ、ときに比喻やユーモアを交えて共に吟味していくことに十分な時間を費やした。彼女のこうした真剣で地道な作業は約1年にも及ぶことになるが、その間、自己の女性性に対して、必要以上に卑下したり、哀しんだり、嫌悪したりすることがなかったのには救われた思いがする。

こうして、報告される夢にも自己許容的な要素が多く含まれるようになっていく。“母が子どもをたくさん産んでいる。よく見ると皆死んでいて石のお地藏さんのよう。ふと目が合うと「オマエだけは生きていたんだね」と泣きながら言う。母がとても愛しい”“霊媒師が私のために祈禱をしてくれて、「オマエはしんから疲れているんだね」と暖かみのあることばをかけてくれる。丸ごと理解してもらったような実感。私もそう思っているんだ”。そして、以前からずっと心の片隅で気になっていた母親の周期的な気分の落ち込みと、父親が抱える不治の病のこと、「身がやせ細るほどの孤独さ、動かしようのない絶望感が自分にも確実にあるとわかって、どんなに楽になったことか」「これは絶対的にリアルで、好き嫌いや現実の次元を超えていると確信できる」と、自己の内的世界や経験に対して開かれた、しなやかさのある許容的な態度がとれるようになっていく。さらには「私には身体と心との間に違和感がある。その違和感を実感するために拒食と過食をしていたように思う」とも述懐し、この時点から、怒りを込めた両性具有の女性はいま描かなくなっている(描く必要がなくなっている)。

③ 社会生活の体験 (1年6ヶ月～1年11ヶ月)

すでに大学はなんとか卒業したが、まだ就職できる自信はもてず、週4日ほど無認可保育所で保育の補助を、夜はコンビニでのパートを始めた。仕事に就いてみると考えていることと実際の生活

は違いが多く、最初は様子がつかめず、動きの要領の悪さを一方的に叱られることへの不満など職場での対人葛藤の訴えがほとんどであった。しばらくして仕事にも慣れてくると、彼女のまなごしはそれほどの怯えをもたずに周囲の人にも向けられるようになる。たとえば保育の場で、泣きじゃくる子どもがいれば保母はすぐにあやしたり抱きかかえたりするが、「子どもが泣く理由や気持ちはいろいろで、そのままそっとしといた方がいいときだってある」し、遊びに加われず、孤立している子の傍らで「ただ一緒にボーといることだって大切なんだ」と思うことがあるという。まだそれを保母にわかってもらえるよう話すことはできないが、「そんな私の感覚は信じられるようになったし、大切にしたい」と、他者に向かって自己主張できるだけの安定した基盤を築くまでには今少し時間を要するが、社会生活を通して自らが感じたこと、考えたことに対する主体の感覚は醸成されつつあることを示している。コンビニでもパート仲間では年長者であるためリーダー的役割を期待されてしまうが、仲間から信頼され頼られて、「私の判断や指示に皆が納得してくれるのは驚きだし、気持ちいい」。

青年にとって現実の社会生活を営むということは、社会の中に自分自身を位置づけていくための不可欠の体験となることはいままでもない。そしてこの体験には2つの側面があり、一つは、何をしたかという“体験の客体”であり、もう一つはどのように体験したか(体験の主体)、つまり“体験の様式”である(成瀬, 1988)。この時期の面接でも基本的には体験の様式に重きを置き、さまざまな社会経験から、身体感覚も含め、そのときどきに自分はそれを“どのように感じ、考え、とらえたか”といった内的な実感に基づく体験過程への焦点化が試みられた。なお、パートを始めて半年頃、保母助手にせよコンビニにせよ「(ある程度の融通性と許容度を備えた)社会な枠(役割)があった方が、人のことを気にせず私の考えや判断で自分らしく動けるし、私も案外やれるもんなんだな〜と思った」としみじみ語っている。

④ 自己イメージの再吟味 (1年12ヶ月~2年2ヶ月)

思い切って老人施設のケースワーカーに応募し採用となる。職場が郊外にあるため、面接は月2回のペースになり、IV期の面接は6回で終結となった。十分な心の準備のないまま就職したが、ワーカーとしての事務的な仕事は福祉の制度や法律をこれから覚えていけばなんとかこなせるという見通しはもてる。すでに老人の処遇について決断を求められることもあるが、数日間さんざん悩んだ末に、納得はいかないが「自分の責任で決めたこと」としてその事実は認められる。今では職場の女性とのプライベートなつき合いで気後れすることはあまりないものの、まだ“神経がすり切れる”という感覚は残るので、理由をつけて断ることはよくある。「何だか少しいやらしい大人になったみたい。けど、仕方ないか」と、現実の生活に根ざした自己の輪郭はしだいにはっきりしてきている。

そして、今、最も気がかりなのは、「老人の前で、どのようなかたができるか」ということ。死と向かい合っている人に、ただやさしく話しかけたり励ますだけでは、ここで仕事をしている意味は半減するようでどこか居心地が悪い。とはいえ、どのようなかわりができるのか皆目わからず、そんな自分に苛立ちや焦りを感じる。「やっぱり、当分はどっぷり仕事につかってみないと駄目ですね」と、少なくとも3年はこの職場で働いてみることを心に決めている。

全体考察

事例の面接過程を中心に、調査の結果をも含め、青年期女子の性アイデンティティ変容過程について考察する。

図3は、面接の開始時と終結時の2回実施した、事例の性度テストの結果である。現在の自己イメージの女性性尺度に関して、調査結果で高群と低群でほとんど差がみられなかったのと同様の傾向が、事例におけるセラピー前後の得点の関係にも認められたのは興味深い。面接開始時(48点)よ

りむしろ終結時（42点）の方が得点が低い、これは“感傷的な”“おしゃれな”“色気のある”など女子青年一般に共通して特徴的とみられている特定の項目の得点が下がったのであり、女性性尺度全体の傾向はほとんど変化していない。調査結果からすると、不適応感を抱く低群であっても女性性に関しては48点を越え、とりわけ女性性に問題があるとは認識してはおらず、女性性尺度得点の高低が青年期女子の精神的健康度（適応度）を把握するための有効な指標とはならないことを意味している。ところが実際の青年期女子の事例では、「女性としての魅力に欠ける、自信がもてない」など女性性に対するコンプレックスを訴える例は多く、本事例でも初期の段階にその傾向が認められた。これは精神的ストレスや葛藤、ひいては自己の存在のあり様そのものに直接触れることは避け、問題を女性としての魅力、身体などに限局することによって内面の混乱が露呈するのを抑えようとしているためとも考えられる。したがってこのような事例の場合、不用意に女性性の問題に焦点を当てて直面化を行なうと、防衛を揺さぶって不安を増大させ、かえって傷を深くしてしまい、セラピーを長引かせる危険性さえある。事例でも、

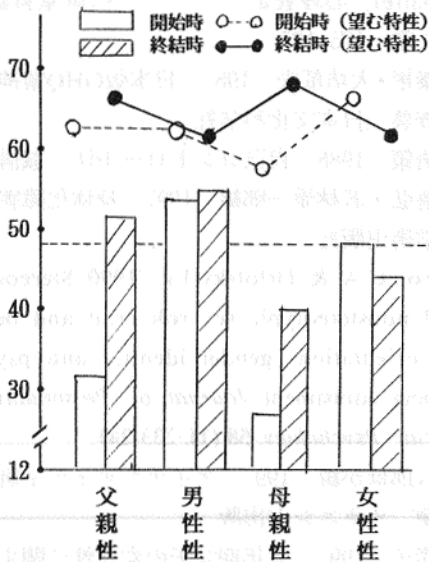


図3. 事例の自己イメージ

彼女はさらに女性性を身につけたいと望み、実際にそれを実現すべく努力しようとしているが、自己探求を続けるなかでそれが中心テーマになったことはなく、女性性の項目に揚げられているような特性を身につけていくことがそのまま自己のパーソナリティの成長へと結びついていくというイメージには発展しにくいといえる。とはいえ、精神的健康の増進にとってさらに女性性を身につけることは不必要ということにはならないのであって、この点については後で再び検討する。

男性性について、高群では女性性とほぼ同じ水準を示している、低群からすればこれから男性性をとり入れていくことが重要な課題になることを示唆している。一方、事例では、男性性は面接の前後を通じて最も高い得点を示し、変化もほとんどない。しかし面接でクライアントが述べているように、以前は対人関係、とくに女友達との関係をなんとか維持するためにやや無理をして演技的に「男の子っぽい感覚で、男の子っぽく振る舞う」という意識がつねに伴っていた。これがパートなどの社会経験を経て自分の行動力やリーダーシップ、論理性が人から認められる体験を重ねることによって、それらが無理なく自然に身についた自らの特性として実感できるように変化している。すなわち、たとえそれが適応のための、ときには防衛のための演技的な男性性であっても、これを基盤にして自己探求やさまざまな社会的経験のなかで検証し、柔軟性を備えることで個性として身につけていったのであり、面接の前後で得点に変化はなくても、男性性の“質”の変容が起きていることは明らかである。この“質”の変容過程の解明については、さらに縦断的調査や多くの事例検討の積み重ねが必要となる。

男性性と同様に、父親性も高群と低群で明確な差異が認められ、父親性の獲得も女子青年にとって成長のための不可欠の条件となる。クライアントも面接経過から父親性が最も変化したことを自覚している。その一番の要因はやはり、自らの足で歩き出すことを心に決め、恐れながらも仲間集団や社会に身をさらす試みを始めたことによる。

まだときには、人の気持ちや状況への配慮を欠き、一方的な判断や行動によって周囲から批判を受けることはあっても、男性性の質の変容にも支えられ、それが相乗的な効果を生み、「少しは広い視野から見られるようになったし、行動に責任がもてる」と自分の状況判断や行動は基本的には人に承認されうるもの、通用しうるものという自負心は育っている。ここで今一度取り上げる必要があるのは、クライアントの女性性の発達についてである。彼女は自己イメージを真剣に吟味していくなかで、確かにこれまでの女性性について根底から揺さぶられはしたが、けっしてそれを否定したり捨てようとはしていない。むしろ、未熟な女性性の段階にとどまることなくつぎのステップに向かおうと努めているのであるが、ただそのとき、感情や感受性を豊かにし、しなやかさをもつといった女性性の特性そのものがこれからとり込むべき当面の課題としてはそれほど意識されていないだけである。すなわち、自分の女性性を育てながらも、それに保障されたかたちで男性性や父親性を身につける方向によりエネルギーが注がれているととらえることができる。したがってこの段階でセラピーは、クライアントの女性性のありのままを肯定的に受けとめながら、父親性・男性性（もちろん母親性も含まれるが）の発現を促し活性化させることが治療的アプローチとしてなにより重要になる。同時にそれは、セラピスト自身が性アイデンティティの諸側面の多層性を理解し、自己の性アイデンティティの様態についても十分に把握しているかどうか問われることになる。

青年期女子の多くがそうであるように、クライアントが母親性を身につけることができたと実感できるようになるのは、男性性・父親性をとり入れ、それが内実化されるようになってしばらくしてからのことであると考え。面接で「老人の前で、どのようなかたができるか」というクライアント自らへの問いかけは、ただやさしさや思いやりだけで相手に接してしまう（包み込んでしまう）という、いわば“グレートマザー（Jung, 1982）”のネガティブな側面ばかりを機能させてしまうの

ではないかという懸念が表明されたものと考えることができよう。“母親が子どもを産み育てる（care）”ということに象徴されるように、たとえ同性に属する特性であっても、女子青年が他者を一人の存在として認め、はぐくみ生かすことのできるような距離の保ち方、かかわり方を身につけていくことは、これから達成されるべき重要な課題としてまだ残されている。

引用文献

- Bem, S.L., 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Heilbrum, A.B., 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, **44**, 183-190.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究教育心理学研究, **26**, 1-11.
- Jung, C.G. (林道義 訳) 1982 元型論：無意識の構造 紀伊國屋書店
- 神田久男 1992 思春期女子のアイデンティティ障害 母子保健情報 **26**, 25-29.
- 神田久男 1998 GHQ (General Health Questionnaire) 心理査定プラクティス (岡堂哲雄編) 至文堂 175-185
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版GHQ精神健康調査票 日本文化科学社
- 成瀬悟策 1988 自己コントロール法 誠信書房
- 成田善弘・若林慎一郎編 1997 身体化障害 岩崎学術出版社
- O'Heron, C.A. & Orlofsky, J.L., 1990 Stereotypic and nonstereotypic sex role trait and behavior orientations, gender identity, and psychological adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58** (1), 233-241.
- 鑓幹八郎ほか編 1997 アイデンティティ研究の展望 ナカニシヤ出版
- 山口素子 1995 青年期女子の女性性に関する研究 風間書房